

七月十日 つづき

午後、日本フィンランドデザイン協会会合。出版、展覧会共に金集めが先決である。 「静けさ」を主題とする展覧会を二〇〇三年にTOKYOで開催しなくてはならぬのだが、仏教関係の諸団体をスポンサーとして考えるのも面白いのではないか。

七月十一日

夕方より建築会館にて「批評と理論」小委員会の連続シンポジウム。第5回はブルーノ・タウトと桂離宮。杉本俊多、藤岡洋保、岡崎乾二郎、進行役、磯崎新、石山修武、何とか5回目まで辿り着いたが、相変わらず会場はほぼ満員で、しかも淡々として満員なのである。焦点を結ぶことの無い時代の過し方としては二つの方法しかない。無理矢理に、いささかの強引さをもって主題を仮定し、その主題の有効性を演技してみせる方法。次に何も仮定せずにそんな時代が通り過ぎるのを待つ方法。

「批評と理論」は本来主題の消えてゆく時代に消滅すること自体を主題にしようとする意図があるように思えるが、会場の淡々とした満員振りを観察するに、そのこと自体が一種の教養としてとらえられているような気がする。

建築は存続するだろうが、その存続するであろう建築の中には「近代建築」は入っていない様な気がする。ブルーノ・タウトを考えて、教養主義に落ち入らぬには、その消滅の予感をもっと生々

しく露出させなくてはならぬのだが、それには会場の淡々とした遠まきの関心が邪魔なのだ。

七月十二日

松崎町の倉の件で佐藤健に電話したら、彼の「阿弥陀の道」プロジェクトに参加するように言われた。秋に二週間程、タクラマカン砂漠、敦煌に旅することになりそうだ。

七月十三日

猛暑続く。朝七時より屋根に上り、野菜に水をやる。ビートルズにフルオンザヒルの唄があつたが、私の場合はフルオンザルーフだな。

グレープフルーツの樹が強風で倒れたので、その修繕をしたり、月見夢を助けおこしたりで、何だか良い人間になったようである。とに面もない。秋に収穫できる晩まきのキュウリの芽がでていて、この部分は鉄板の熱がきちんと伝わり易い部分なので水を絶やさないうようにしなくてはならない。屋根の上の人型フレームもできたので、カラス防護のネットを張らなくては。すでにトマトの一部とピーマンがやられている。

朝八時三〇分朝食。十時大学。今日は大学院の最終講議だが、何故だか気分がのらない。聴いている学生の体温が低いのが伝わってくるからだ。